

妙安寺だより 310号

暦の話 ⑥ 語句の解説(その2)

昨年配布いたしました暦(妙法一天暦)の中の語句(2～3ページ参照)を解説します。

「二十四節気」

二十四節気は、季節の変化を知るために、冬至から冬至の前日までを二十四等分し、それぞれの年にわりふったもので、年によって日付けは違うものの、季節の移り変わりがわかるのです。

しかし、二十四節気は中国の北部あたりで出来たもので、日本の実際の季節とは少しずれがあるといわれています。

季	節		気	
春	2月	立春 啓蟄 清明	雨水 春分 穀雨	雪より雨が多くなる
	3月			昼夜が等しくなり、翌日から昼が長くなる
	4月			雨が多く、農作物が盛んに成長する季節
夏	5月	立夏 芒種 小暑	小満 夏至 大暑	植物が実をつけ、万物が満つるという意味
	6月			昼が最も長く夜が短い。梅雨の時期でもある
	7月			梅雨も上がり、一年中で最も暑い季節
秋	8月	立秋 白露 寒露	処暑 秋分 霜降	暑さがおさまる頃といい、収穫も近い
	9月			昼夜が等しくなり、以後夜が長くなっていく
	10月			秋も深まり初霜が降りて、冬が間近くなる
冬	11月	立冬 大雪 小寒	小雪 冬至 大寒	寒さは厳しくないが、ちらほら雪が舞う季節
	12月			最も昼が短い日。
	1月			一年中で最も寒さが厳しい

【読み方】

立春=りっしゅん 啓蟄=けいちつ 清明=せいめい 立夏=りっか 芒種=ぼうしゅ 小暑=しょうしょ 立秋=りっしゅう 白露=はくろ
寒露=かんろ 立冬=りっとう 大雪=だいせつ 小寒=しょうかん 雨水=うすい 春分=しゅんぶん 穀雨=こくう 小満=しょうまん
夏至=げし 大暑=たいしょ 処暑=しょしょ 秋分=しゅうぶん 霜降=そうこう 小雪=しょうせつ 冬至=とうじ 大寒=だいかん

「八 専」(はちせん)

もともと軍事上の忌日とされ、出陣・出兵・軍営を築くことを避けたが、さらに、この日に灸をすえたり、柱を立てたりすることも不吉とされるようになった。古代の中国では、この日を吉とされている。

「十 方 暮」(じゅっぽうくれ)

結婚や相談事は凶とされる。十方暮を途方暮にこじつけ、何事かを始めると、途方に暮れる結果になるという。

天候が悪化して途方に暮れるから、旅行は凶とされる。

「三 伏」(さんぷく)

初伏・中伏・末伏の総称。夏至以後、三度目の庚(かのえ)の日を初伏、四度目の庚(かのえ)の日を中伏、立秋以後、最初の庚(かのえ)の日を末伏とする。

従って、夏の最も暑い時期。種まき・結婚などは避けるべしという。

「社 日」(しゃにち・しゃじつ)

春分と秋分に最も近い、前の戊(つちのえ)の日。

土地の神を祀って、春には五穀の種を供えて豊作を祈り、秋には初穂を供えて成熟・収穫を感謝する。

一方では、この日に結婚式を挙げてはならないとか、酒を飲むと聾（耳が聞こえない）が治るとかいられている。

「天 - 天上」(てんいちてんじょう)

天一神（火の神・良神ともいう）という空想上の暦神は60日のうち、44日は地上を巡って、人間の善悪を見ているが、癸巳（みずのと み）から己戌（つちのと いぬ）までの16日間は地表に居らず、天一天上だとされる。

この間には、どちらの方角に向かっても、自由に動いてよいとされている。

「天 赦 日」(てんしゃにち)

春は戊寅（つちのえ とら）・夏は甲午（きのえ うま）・秋は戊申（つちのえ さる）・冬は甲子（きのえ ね）の日を指し、天が罪を赦すから何事を行なっても大吉であり、暦のうち第一の吉日だとする。

(終)